

# 女房・紫式部の心情描写

## ―「勅撰和歌集」収録の雑歌の特徴―

千古 利恵子

平安時代中期は、『源氏物語』をはじめ女人に拠って多数の文学作品が創作された。作者たちの中には「女房」と呼ばれた職業婦人が多く、紫式部もその一人である。本稿では、『源氏物語』の作者という視点からの紫式部の心情ではなく、女流専門歌人としての紫式部の心情を勅撰和歌集の雑部に収録された歌の描写手法から考察する。併せて、一条天皇の中宮・彰子に出仕し重用された女房としての心情を、それらの歌の詠歌表現から検証する。

キーワード：紫式部、「勅撰和歌集」雑歌、女房職、職業観、心情描写

### 1. はじめに

紫式部は、『源氏物語』の作者として有名であるとともに、多数の和歌を詠じた歌人としてもその名を残している。伝存する和歌の中には、勅撰和歌集に採録された作が61首ある。勅撰和歌集の初出歌は、「みよしのははるのけしきにかすめどもむすぼはれたるゆきのしたくさ」（『後拾遺和歌集』（春上・10）で、「一条院御時殿上人はるのうたとてこひはべりければよめる」と詞書にあるように、女房として一条天皇の中宮・彰子に出仕していた時に、実家に戻っていたが新年になっても何らかの事情があり出仕しない状況で詠じた作である。良家の子女の憧れは「女房として出仕すること」とされるが、その職に就いた紫式部の心境は図り難い。勅撰和歌集に収録された歌の検証から、紫式部の心情を考察する。

### 2. 勅撰和歌集収録歌の背景

紫式部の勅撰和歌集デビューは、『後拾遺和歌集』の3首である。その後は『千載和歌集』に9首収録されるが、その間に編纂された『金葉和

歌集』『詞花和歌集』には一首も収録されていない。その理由は、『金葉和歌集』の撰者・源俊頼と『詞花和歌集』の撰者・藤原顕輔の詠歌志向が紫式部の詠風とは異なっていたからといえる。文学作品は、その作者の人生と密接に関わりながら誕生するように、紫式部の和歌にはその人生が背景に描かれている。源俊頼・藤原顕輔の両名を引き付ける人生描写がその詠風から認められなかったといえそうだ。しかし、紫式部の歌に興味を示した勅撰和歌集の撰者はいる。その撰者たちが共鳴した紫式部の心情を、雑部の歌から明らかにする。

#### 2-1 『新古今和歌集』雑歌と詠歌の背景

『新古今和歌集』の収録歌は14首〔四季歌（4首）賀歌（1首）哀傷歌（3首）離別歌（1首）羈旅歌（1首）恋歌（1首）雑歌（3首）〕である。その中から、人生の機微を詠じた歌を排列する雑歌から、その詠歌の背景を考察する。

ア 1485 歌（雑上）

四月祭の日まで、花ちり残りて侍りけるとし、その花を使少将のかざしにたまふ

葉にかきつけ侍りける 紫式部  
神よには有りもやしけむ桜花

けふのかざしにをれるためしは  
イ 1499 歌 (雑上)

はやくよりわらはともだちに侍りける人  
の、としごろへてゆきあひたる、ほのか  
にて、七月十日の比、月にきほひてかへ  
り侍りければ 紫式部  
めぐりあひてみしやそれともわかぬまに  
雲がくれにし夜半の月かけ

ウ 1567 歌 (雑上)

法成寺入道前太政大臣、女郎花ををりて  
歌よむべきよし侍りければ 紫式部  
をみなへしさかりの色をみるからに  
露のわきける身こそしらるれ  
返し 法成寺入道前太政大臣 (道長)  
白露はわきてもおかじをみなえし  
心からにや色のそむらん

ア「神よには」は、珍しく葵祭の頃まで散り残った桜の花を詠んでいる。勅使の頭に挿すために散り残った桜を折ったようだが、神代ではあったのかもしれないが、このようなことは今頃には聞かないというのである。紫式部は、自身が目にした光景を詠じたにすぎないだろうが、女房職の女人たちには宮中は尊い神聖な場所であると感じていたといえる。勅使の姿は、正に神聖な場所を示す特別なものであったのだろう。イ「めぐりあひて」は、幼友達との久しぶりの再会であったにもかかわらず、友は急いで帰ったことを詠じている。昔を懐かしく語り合うことも無く帰った友がいたという、記録の詠といえる。

ウ「をみなへし」は、主である彰子の父・法成寺入道前太政大臣 (道長) との贈答歌で、鮮やかに咲く女郎花と自身の立場を比べて詠じている。女房として出仕が叶うか否かは、その出自

で決まる。越後守・藤原為時の娘であり、権中納言・藤原為輔息の宣孝 (右衛門権佐、山城守を兼) の妻であったことは、紫式部が女房として出仕するための条件を充たしていたことになる。道長と歌の贈答が出来る立場にいたことは、紫式部の出自<sup>1)</sup> から肯けるが、自身を「露のわきける身」(露に区別されている) と表現し、道長は「心からにや」(心掛けによる) と歌を返す。女房職にある者は、仕える主の縁戚に対して常に自身の立場をわきまえた言動が求められていたのである。

藤原道長 [康保三 (966) 年生一 万寿四 (1028) 年没] は、藤原北家、摂政・関白・太政大臣・藤原兼家の五男 (または四男) で、後一条天皇・後朱雀天皇・後冷泉天皇の外祖父であったことから、一条天皇の二后 (定子・彰子) に纏わる人達の権力闘争は熾烈であった。『紫式部日記』には、彰子が孫皇子となる敦成親王・敦良親王誕生時、道長の狂喜ぶりが記されていることから明らかだ。<sup>2)</sup> 道長との贈答歌には、二后の女房たちが、公卿たちの権力闘争と無縁ではいられなかったことから、紫式部もその状況に敏感にならざるを得なかったとの推測が可能になるのである。

ア「神よには」イ「めぐりあひて」の二首は、定家を含む全撰者の合意で『新古今和歌集』に撰入されている。さらに両首とも後鳥羽院の高い評価を得ていたことは、隠岐本『新古今和歌集』記載記号から分かる。<sup>3)</sup>

盛りの季節を過ぎると散り行く桜が、不思議なことに葵祭の頃までその花を咲かせている様子詠じたア「神よには」は、都での栄華を失い今は隠岐での生活を強いられている後鳥羽院にとって、自身の心境に通じるものがあったのだろう。またイ「めぐりあひて」の下句「雲がくれにし夜半の月かけ」は、隠岐に居るまさ

に我が身そのものと鑑賞したのだろう。第五句「月かけ」は、都での輝かしい我が身を「月」に、第四句「雲がくれにし」を配流になり輝きを失った今の自身だととらえたのだろう。無論ア「神よには」イ「めぐりあひて」に込めた紫式部の心情と、この二首を鑑賞した後鳥羽院の心情は同一ではない。社会的立場は異なるが、回避できない苦悩を抱えていたことは「天皇・中宮の女房」両者に共通する心情といえる。それこそが、隠岐に配流後の後鳥羽院が紫式部の二首を再度評価した理由と推定できるのである。ア「神よには」ウ「をみなへし」の両首は、女房の立場を明確に示す歌といえるが、イ「めぐりあひて」はその意識は少ないようだ。久しぶりに会った幼友達が、僅かな時間で帰ったことを残念がり、つれなさを詠じているといえる。昔語りする仲間がいない女房勤めの淋しささえも、幼友達との再会になぞらえる以外に方法は思い浮かばなかったのだろう。女房としての孤独を詠じたかのような作である。

イ「めぐりあひて」は、晩年の定家が撰歌し編集した『小倉山荘色紙和歌』<sup>4)</sup>に収録されている。この作品には詞書の記載は無いため『小倉山荘色紙和歌』注釈書<sup>5)</sup>の多くは、『新古今和歌集』の詞書をふまえて解説する。例えば『応永抄』では「我友だちを月によそへて」と、『経厚抄』では「もとの友だちにめぐりあひて」のように、旧友の正体に関する注釈はない。『水無月抄』<sup>6)</sup>では「かねてあひたる人に中たえてめぐりあひたるとき、それかあらぬかと見もわかぬまに、やがて人にへだてられたり。なかくもかくれしたる月月のごとくいへり。その人なんおとこなり」と記す。いずれにしても、幼友達の人物は明らかでない。

『紫式部日記』収録の18首の中に、この歌は含まれていない。『水無月抄』にいう旧友が男性

であったとしても、紫式部の人生に影響を与える存在ではなかったといえよう。雑部に収録されているため、叙景歌としての評価では無く、女房としての心情を詠じた抒情歌としての評価を得たのである。

ア、イ、ウの三首から、女房職には「個人的心情の表現は極力避け、人間関係に配慮する」詠歌能力が不可欠といえる。この観点に拠れば、紫式部は自身の心情を総て包み隠しながら歌を詠じていたことになるが、はたしてそうだろうか。『新古今和歌集』撰者の一人である定家が単独で纏めた『新勅撰和歌集』収録歌には、この疑問を解明するの手掛かりがあるかもしれない。

## 2-2 『新勅撰和歌集』雑歌と詠歌の背景

『新勅撰和歌集』の収録歌は5首〔四季歌(1首)賀歌(1首)恋歌(1首)雑歌(2首)]である。定家が雑歌に排列した2首の詠歌の背景をさぐる。

### エ 1060 歌 (雑一)

ゆふづく夜をかしきほどに、くひ  
なのなき侍りければ

上東門院小少将

あまのとの月のかよひぢささねども

いかなるかたにたたくくひなぞ

(1059 歌)

返し 紫式部

まきのともささでやすらふ月かけに

なにをあかずとたたくくひなぞ

### オ 1105 歌 (雑一)

冬ころさとにいでて、大納言三位につか

はしける 紫式部

うきねせし水のうへのみこひしくて

かものうはげにさえぞおとらぬ

返し 従三位簾子

打ちはらふ友なきころのねざめには

つがひしをしぞ夜はにこひしき

(1106 歌)

エ「まきのとも」は上東門院小少将と、オ「うきねせし」は従三位簾子と交わした贈答の二首である。

エは、上東門院（中宮・彰子）に仕えた小少将（源扶義娘）が「ゆふづく夜をかしきほどに、くひなのなき侍りければ」と詞書に記すように、水鶏の声が聞こえる月夜に情趣を感じ「あまの月のかよひぢささねどもいかなるかたにたたくくひなぞ」と詠んでよこした歌に応えた作である。

小少将と紫式部は共に中宮・彰子に仕えたことから、親しい間柄だといえる。水鶏の鳴く声を「だれに思い入れがあって、家の戸叩くように鳴くのか」との意を「いかなるかたにたたく」と表現し、紫式部に歌を送ってきたのである。北村季吟が『新勅撰和歌集口実』に「さらでやすらふはねをあかずもといふに明（アカ）す（ズ）とそへてにや」と注を付すように、「戸は開かなくても、夜を明かしましょう」と応えている。誰の訪問を待ち焦がれているのか、さらに訪れの有無はさておき、二人の女房は水鶏の声を聞きながら夜明けまで月を眺め過ごすのである。宮中の華やかさの中で過ごす女房たちには、月夜を「をかし」と受け止めながら一抹の哀愁を漂わせる日々も、その職の背景にあるのだろう。オ「うきねせし」は、上東門院（中宮・彰子）に仕えた従三位簾子（道長の正室倫子の姪、道長側室とも）に送った歌である。「あなたと仮寝をした中宮・彰子の御前だけが恋しい」と、紫式部は女房仲間の簾子に伝えている。「上毛の霜を共に払う友がないこの頃の夜半は、あなたが恋しい」と簾子は歌を返している。この二人の女房にとって「うきねせし水のうへ」とは中宮・彰子の御前のことで、「上毛に置いた霜を払う鴨

のつがいのように、あなたと私はいつも御前に仕えていた」と、互いを恋しく思っていることを伝えあう。この贈答歌は、女房職にある者同士が、互いをどう受け止めていたかが伺える。

出自が出仕後の立場—重要視されるか否か—を左右する時代に、この贈答歌は二人の信頼関係を示す例といえる。エ「まきのとも」オ「うきねせし」の二首は、女房という立場をわきまえながらも、女房職の制約に縛られない紫式部の心情を詠じた例といえる。

『紫式部日記』（十月十日余の記述）<sup>7)</sup>には、時雨の空を眺める私・小少将はあなた（紫式部）を慕っている、と詠じた小少将の歌「雲間なくながむる空もかきくらしいかにしのぶる時雨なるらむ」に対して、「ことわりの時雨の空は雲間あれどながむる度でぞかわくまもなき」と、時雨の時期にも雲間はあるけれど物思いに沈み涙にくれる私の袖は乾く間さえないと、紫式部はその心情を詠じて返した歌の二首が記されている。小少将に対しては、自身の心情を包み隠さず歌で表現していたことが、エ「まきのとも」オ「うきねせし」の二首同様に紫式部の日記からも明らかになる。

### 2-3 『続後撰和歌集』 雑歌と詠歌の背景

『新古今和歌集』『新勅撰和歌集』の収録歌は、二条派歌人・定家の詠歌志向が撰歌基準だといえる。『続後撰和歌集』は、定家の息・藤原為家が撰集した第10番目の勅撰和歌集である。為家は御子左家の嫡男で二条派の継承であることから、その収録歌は『新勅撰和歌集』の歌風を受け継ぐとされる。この集の収録歌は、3首〔四季歌（2首）雑歌（1首）〕である。

為家が評価し、雑部に排列した歌は道長邸で詠じた作である。

## カ 1012 歌 (雑上)

東北院のわたどののやり水にかけをみて  
よみ侍りける

かけ見てもうきわが涙おちそひて

かごとがましきたきのおとかな

詞書の「東北院」は中宮・彰子の父である藤原道長の屋敷である。カ<sup>1012</sup>の詠歌場所が、道長邸の渡殿であることから、紫式部が女房の中でも特別な立場であったことが推測できる。にもかかわらず、第四句では邸宅の滝の音を「かごとがましき」と表現する。遣水に辛くて流した自身の涙が加わったことで滝の音も恨み事を言っているように聞こえる、というのである。特別な処遇を受ける女房でありながら、自らの「かけ」(姿)に涙するのは何故か。誰の目も無い場所であったからこそ、自身の想いを詠じられたに違いない。従って、カ「かけ見ても」は、女房職にある女人の心情を吐露した一例といえる。

なお北村季吟は『続後撰和歌集口実』で「<sup>ワタノ</sup>廊和名東北院法成寺の内に在て上東門院おはせし所なれば紫式部も住侍しなるへし」「うき我涙とはそこでの述懐の心にや」と注を付す。

『続後撰和歌集』収録の四季歌には、道長との関わりの程を示す紫式部の「くもりなき空のかがみと見るまでに秋の夜ながくてらす月かけ(秋中・327 歌)」の一首がある。<sup>8)</sup> この詠は、法性寺入道前摂政太政大臣(道長)の「雲ちよりみなそこまでにすむ月はうへしたてらすかがみとぞ見る(秋・326 歌)」の直後に排列されており、詞書「家の屏風に」と詠歌事情を記す。詞書の「家」は道長邸であり、その邸宅に設えた屏風絵を見て詠まれた2首ということになる。紫式部を自邸に招いていたことから、道長が娘・彰子に仕える女房たちの中で一目置く存在としていたことが分かる。「くもりなき」の詠には、女

房としての教養の高さは認められるが、心情の吐露は無い。道長から各別な処遇を受けつつも、その深奥の苦悩は、日記に記すに留めていたのだろう。

『紫式部日記』(十月十日余の記述)には、「水鳥を水のうへとやよそに見むわれも浮きたる世をすぐしつ」の詠に続き「かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいとくるしかななりと、思ひよそへらる」と記す。<sup>9)</sup>

「楽しそうに遊んでいるように見える水鳥も、水鳥自身は苦しいだろうと詠じるのは、まさに自分と水鳥は同じなのだと感じているからだ。カ「かけ見ても」と「水鳥を」の詠には、女房として出仕する者が抱える思いが吐露されているが、如何なる苦しみをも隠さなければならないのが女房職である。「身はいとくるしかななり」と記せるのは、私的な日記以外には無いということになる。

以上のことから、勅撰和歌集収録歌の背景を探るには、私的な記録をも踏まえることが必要になるのである。

## 2-4 『続千載和歌集』雑歌と詠歌の背景

『続千載和歌集』の撰者・二条為世は、紫式部の詠を一首収録する。為世は、藤原為氏の長男で、二条・京極・冷泉の三家に分裂後、二条家として二条派の詠風を継承する。従って、紫式部の雑歌は、二条派の詠歌志向に叶った歌といえる。

## キ 1864 (雑中)

歌絵に、あまのしほやくところにこりつ  
みたる木の本にかきて、人のもとにつか  
はしける 紫式部

よもの海のしほくむ海士の心から

やくとはかかるなげきをやつむ  
内閣文庫蔵(正保四年刊本 和学講談所)『続千



載和歌集』、『紫式部集』(30)では、初句「よもの海の」は「よもの海に」と歌本文に異同があるが、詠歌内容に大差は生じない。

詞書には「和歌の内容を表現した絵に、紫式部が自身の歌を付けてある人に送った」と詠歌事情を記す。歌本文には、あちこちの海辺では海士が藻塩を焼くために薪を積み重ねている。あなたはこの絵のように、あちらこちらの女性への恋心で身を焼いている、と詠じる。表面的には、多くの女性に恋する人を海士が薪を積み様子に擬えるのだが、「だからあなたの私への恋心は信じられない」との意味を込める。この詠を送った男性は不明だが、第五句「なげきをやつむ」のは海士では無く私なのだ、と紫式部はその心情を詠じているのだろう。眼前の景では無く絵の中の情景を詠んだにすぎないキ「よもの海の」だが、紫式部の恋愛感情が詠じられた歌といえる。

紫式部に限らず女房達が詠じた恋歌は多数あるが、キの詠もその一例である。女房職にあった女人の恋愛感情が伺える歌であると理解しながら、撰者・為世はあえて「雑歌」として収録している。その理由は、第五句「なげきをやつむ」が女房職にある紫式部の職業人としての苦悩の吐露と捉えたからに違いない。

## 2-5 京極派の紫式部評—『玉葉和歌集』雑歌と詠歌の背景

伏見上皇下命・京極為兼撰『玉葉和歌集』は、二十一代集中で最大の約2800首を収録する第14番目の勅撰和歌集である。京極派は二条派とは異なる詠風を確立しており、「心の絶対的尊重に基づき、研ぎ澄まされた感覚で捉えた対象を、心の中で再構築して歌としたもの」を庶幾したといわれる撰者・為兼は、紫式部の歌を8首〔四季歌(4首)恋歌(1首)雑歌(3首<sup>10)</sup>〕撰入し

ている。

### ク 2050 歌 (雑一)

しも月ばかりに物おもひける人のうれへ  
たりける返事につかはしける 紫式部  
霜こほりとちたる比のみづぐきは  
えもかきやらぬこちのみして

### ケ 2298 歌 (雑四)

東三條院かくれさせ給ひける又の年の  
春、いたくかすみたる夕暮に人のもとへ  
つかはしける 紫式部  
雲のうへのもの思ふ春はすみぞめに  
かすむ空さへあはれなるか

### コ 2391 歌 (雑四)

世の中つねならず侍りける比、槿の花を  
人のもとにつかはすとて 紫式部  
きえぬまの身をもしる／＼あさかほの

露もあらそふ世を嘆くかな  
ク「霜こほり」は、物思いに沈む人からの便りに「あなたの悩みを払いのける方法が浮かばず、どう返事を書いたらよいかと途方にくれます」と詠じる。

ケ「雲のうへの」は、一条天皇の生母・東三条院詮子が没した長保3年間12月22日の翌春の歌で、「雲の上という宮中也悲しみで閉ざされているこの春は、空まで喪服色に霞んで悲しく感じる」と詠じる。

コ「きえぬまの」は、長保3年に疫病が流行し多数病死したことから「朝顔に置く露とその消えるのを争うように、人が死んでゆく」と詠じている。現世のはかなさを嘆いた一首である。

ク・ケ・コでは、逃れようのない「離別」の苦悩をテーマに詠じている。「離別」に勝る苦悩—それはコ「きえぬまの」で詠じられた「死」である。長保三年に夫を亡くした紫式部には、「命」は一瞬に消滅する「朝顔の露」のようなものであると感じていたに相違いない。「研ぎ澄まされ

た感覚」で「朝顔の露」を見つめ、それを「命のはかなさ」として「心の中で再構築」して三十一文字に収める。

為兼が『玉葉和歌集』雑部に収録した3首は、二条派の手に拠る勅撰和歌集の収録歌【ア〜キ】とは心情表現が異なるのである。中でもコ「きえぬまの」は、亡き夫を忍ぶ妻の悲しみの表現だけではなく、「死」をどう捉えていたのかという女房職にある者が見つめる現世の無常が吐露された一例だといえる。二条派と京極派との詠歌志向の違いは、歌の主題からも明らかになるのである。

### 3. 紫式部の職業観

中宮・彰子に仕える女房は多く、女房たちの役割は身分で異なるものの、その内容は多様であった。古瀬奈津子氏は、紫式部の立場（役割）を「記録係」であったと論じる。<sup>11)</sup>

女房職の役割は、女房としての身分に左右される。『新訂官職要解』<sup>12)</sup>に拠ると、身分は「上臈 中臈 下臈」に分かれ、「乳母・典侍一掌侍（内侍）一命婦一女蔵人」に分類される。中宮・彰子の女房では、一条天皇の乳母で敦成親王の乳母・橘三位（典侍・徳子）、大納言の君（源簾子）、小少将の君などが「上臈」の女房で、その多くは道長や倫子の縁者といわれる。「中臈」の女房は、宮の宣旨、内侍、命婦と呼ばれて、受領階層の娘や妻室の者が多い。それらの女房は、原則として公的な役職を持つた。「上臈」「中臈」には局が与えられ、常時伺候する者と里に住み臨時で出仕する者に分かれた。紫式部は、局を持ち、常時伺候する「中臈」であったことから、中宮・彰子の傍に侍り仕えていた。ただ、紫式部は衣食住の奉仕などの一般の仕事<sup>13)</sup>だけでなく、漢籍の教示をする立場にあったことから、他の「中臈」女房の位置とは異なるのである。「記

録係」は特別な立場の女房が担う仕事であったようだ。

『小右記』長和二年五月二十五日の条には、次の記述がある。

二十五日、乙卯。資平を去ぬる夜、密々に皇太后宮に参らしめ、東宮、御悩の間、假に依りて参らざる由を啓せしむ。今朝、帰り来たりて云はく、「去ぬる夕、女房に相逢ふく越後守為時の女。此の女を以て、前々、雑事を啓せしむるのみ。」。彼の女、云はく、『東宮の御悩、重きに非ずと雖も、猶ほ未だ尋常に御さざる内、熱氣、未だ散じ給はず。亦、左府、聊か患ふ氣有り』と」てへり。<sup>14)</sup>

この記述は、紫式部が「記録係」を務める特別な女房であったことを示す。「中臈」の身分ながら特別な役目を担う立場なら、女房という仕事に対する悩みは無かったのだろうか。そうではない女房としての苦悩の様子が、勅撰和歌集の雑歌【ア〜コ】には、認められたのである。

紫式部の閨歴は、先学の研究から概ね以下のようによまとめられている。<sup>15)</sup>

- ・天禄元(970)年[あるいは天延元(973)年生～没年未詳]
- ・越後守藤原為時の次女
- ・藤原宣孝の妻[父の友人、長保三(1001)年死別]
- ・大式三位(賢子)の母
- ・中宮彰子の宮廷に出仕[寛弘二(1005)年～三年頃から]
- ・『源氏物語』完成『紫式部日記』を纏める[寛弘七年頃]
- ・宮仕えの中断[長和二(1014)年～数年]
- ・上東門院(彰子)に再度出仕[寛仁二(1018)年～終了年は不明]
- ・晩年『紫式部集』編纂[年次不明]

紫式部と藤原宣孝との結婚について、日本古

典文学大系『紫式部日記』の解説には、結婚当時「この夫はすでに四十台半ばに達し、数人の妻妾との間に、年輩も式部のそれを上まわるような息男以下あまたの子どもをもうけていた。」こと、宣孝は「冷静で沈着で、しんの強そうな式部との応答には辟易したらしところも見えるようだ。彼女は、結婚によって歓喜や陶醉の中に自己を没しきることなく、かえってこの関係を通じてあやにくに微妙な人情の機微をかみしめることになったであろう。」とある。<sup>16)</sup>

紫式部は、夫の死から数年後に女房として出仕しているが、十年ほど経つ頃にしばらくはその出仕を中断する。公的な役割を担い、女房として揺ぎ無い立場にしながら、出仕を拒んだのは何故か。二年余りの短い結婚生活から「人情の機微」を理解し女房としての務めを果たしていたものの、中宮やその父・道長ならびにその縁者、女房仲間との交流に自制を強いられる女房職への迷いが、夫の死から歳月を経た頃に湧き上がったのだろうか。花やかな宮廷世界とはいえ、そこは上流貴族の男性たちがとりしきる場であり、寡婦の「中臈」女房に過ぎない紫式部は、払拭しきれない苦悩との葛藤があったことは、晩年に自身が纏めた『紫式部集』<sup>17)</sup>収録の三首からも推測できる。

サ『紫式部集』48歌

世のはかなき事を嘆く比、陸奥に名ある所／＼描いたる絵を見て、塩釜  
見し人の煙となりし夕より  
名ぞむつましき塩釜の浦

シ『紫式部集』113歌

返し  
ふればかく憂さのみまさる世を知らで  
荒れたる庭に積もる初雪

ス『紫式部集』114歌

いづくとも身をやる方の知られねば

憂しと見つゝもながらふる哉

サの「見し人」は夫・宣孝のことで、夫が茶毘にふされ煙となった頃から、藻塩を焼く煙は親しいものになった、と詠じる。第四句に「むつまし」とあるが、そこには悲しみから逃れられずにいる心情の表現といえる。

シ・スの二首は、もと同僚の女房から「初雪降りたる夕暮れに、人の」の詞書を付す「恋しくてありふる程の初雪は消えぬかとぞ疑はれける」(『紫式部集』112歌)歌が届き、その返しに送った和歌である。紫式部を慕う女房が「初雪が積もることなく消えてしまうように、私はあなたへの思いの切なさで、今にも消えるのではと疑う」と懐かしむ気持ちを詠んで送ってきたのである。

紫式部は、当時既に女房職を辞していることから、女房としての盛りを終えた自身をシ「ふればかく」では「生きていると嘆かしさがつのる現世であるが、そのことも知らずに年月を経ている。荒れた我が家にも初雪が降り積もっている」と表現し、ス「いづくとも」では「この身をどこにやればよいのか分からず、この世を辛いと思いながら、生きている」と心情を詠じる。

伊藤博氏は、『紫式部集』について「歌集を瞥見して気づくのは、かの女がみずからの感情をなまの形で歌い上げることが少なく、客観的な景物を表立て、これにみずからの思いを託し封じこめるような形で歌う傾向が強いことである。」と述べる。<sup>18)</sup>

サ「見し人の」は、塩釜の絵を見て詠んだ歌で、实景を前にした叙景歌では無い。シ「ふればかく」は、自宅の雪景色を詠じた正に叙景歌である。ス「いづくとも」は、返歌であることをふまえないければ、叙景歌というより抒情歌であるといえる。サ・シの両首は、伊藤氏のいう



「客観的な景物を表立て」ながら「みずからの思いを託し封じこめる」詠歌手法である。スは、控えめながらも自身の思いを吐露しているといえる。

女房職を辞してから、紫式部は「自身の感情を包み隠すという女房に要請される姿勢」を失うことは無かったと、その詠歌からいえる。

#### 4. まとめ

『紫式部日記』は、晩年に紫式部自らまとめた日記といわれる。知北美智子氏は「他の女流日記文学が物語と区別がつかない内容を含んでいるのに対して、徹底した記録性をもつ」ゆえに、その記録の中に「紫式部の心情が見え隠れしている」と述べる。<sup>19)</sup>

本稿で取り上げた勅撰和歌集の雑歌には、他者との交流の状況や実景を詠じた作で、自身の心情を吐露していると推測されはしても、あからさまな表現は用いていない。知北氏の指摘通りその心情表現は「見え隠れ」程度なのである。それは女房職であることを強く意識し、自制していたからだろう。『紫式部日記』に「くせぐせしく、やさしだち、恥ぢられ奉る人にもそばめたてられで侍らまし」<sup>20)</sup>と記すように、個性的で優雅にふるまい中宮・彰子から一目おかれている上臈の女房達の反感を持たれないように、心掛けていたことが分かる。また「すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどやかに、おちぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしくうしろやすけれ。」<sup>21)</sup>と記すように、有るべき姿は「教養も情操も魅力があること」「万事に穏やかで心構えもゆったりして沈着であることが土台にあること」で、そのような人こそが「信頼のおける」女性であり「女房」であると考えたにちがいない。

従って、勅撰和歌集は公的な歌集であること

から、勅撰和歌集に収録された紫式部の歌 61 首は、各集の撰者から「教養の高さと豊かな情趣を備える」との評価された作といえるのである。本稿で取り上げた〔ア〜コ〕の 10 首も、同様の評価を得た作であり、しかも雑部に排列されているからには、雑歌の特徴である「人生の機微」が表現されている作といえる。「人生の機微」を詠じた歌には、人生の悲哀を吐露している作も少なくないが、紫式部の雑歌は自身の感情を情趣豊かに、穏やかに表現しているといえる。しかし、その表現の穏やかさは、女房として出仕した日々を通じて習得した「心情の自制」から生み出された詠歌手法であり、女房・紫式部独自の心情描写の技法といえるのである。

#### 注

- 1) 『和歌大辞典』明治書院、他参照。
- 2) 『新日本古典文学大系』岩波書店、(底本：陽明文庫蔵本) p159 以降にその様子が確認できる。
- 3) 日本古典文学大系本『新古今和歌集』(底本：小宮所蔵本) では、「隠岐本」を合点の記載を用いて記す。
- 4) 定家撰『小倉百人一首』の学術資料名。
- 5) 島津忠夫・上條彰次著『百人一首古注抄』和泉書院、1976  
吉田幸一編『影印本 百人一首抄〈宗祇抄〉』笠間書院、1985  
『小倉山僻庵抄』築瀬一雄 編著『碧冲洞叢書』第 13: 第 84 輯収録 他参照。
- 6) 築瀬一雄 編著『碧冲洞叢書』第 12: 第 82 輯、臨川書店、1968
- 7) 『日本古典文学大系』岩波書店 (底本：群書類従本) p463  
『日本古典文学全集』小学館 (底本：黒川真道旧蔵、宮内庁書陵部蔵本) p125  
なお、両本の本文には異同がない。
- 8) 佐藤恒雄は「くもりなき」の詠は、削修過程で生じた錯誤で、作者は伊勢大輔とするが、紫式部の作とする通説に従い、本稿では考察した。  
久保田淳監修 佐藤恒雄著『続後撰和歌集』(和歌文学大系 37) 明治書院、2017
- 9) 『日本古典文学大系』 pp.461 ~ 462、『日本古典文学全集』p125 なお、両本の本文には異同がない。

- 10) 3首は『紫式部集』【『新日本古典文学大系24』岩波書店】の(11歌・40歌・53歌)で、ケの初句「雲のうへの」が「くものうへも」と、歌本文に異同がある。  
なお、「新日本古典文学大系24」の底本は、古本系の善本陽明文庫本(室町後期書写)である。
- 11) 「女房としての紫式部」お茶の水女子大学、フランス共同ゼミ
- 12) 和田英松著・所功校訂 講談社学術文庫 621
- 13) 今西祐一朗校注『和歌職原抄』東洋文庫 758 p240には「昔号命婦 侍臣女已下也」とあり、「中臈」は「命婦」と呼ばれて、身分も高くなかったことが分かる。
- 14) 国際日本文化研究センター 「撰関期古記録」データベース 『小右記』(長和二年五月二十五日)の本文(書き下し文で掲出されている)。
- 15) 徳満澄雄「紫式部は鷹司倫子の女房であったか」語文研究 62、1886、九州大学国語国文学会 他参照。
- 16) 解説は池田亀鑑・秋山虔両氏の執筆。引用は pp.425

～426 から抄出。

- 17) 「新日本古典文学大系本」の本文を掲出。
- 18) 「新日本古典文学大系24」解説「『紫式部一人と作品』三 紫式部集」p553
- 19) 知北美智子「紫式部日記に関する一考察」熊本女子大学国文談話会 第36号 p77、1990
- 20) 「日本古典文学大系本」p498 「新日本古典文学大系」p312 「日本古典文学全集本」p206  
なお、3本の本文には異同がない。
- 21) 「日本古典文学大系本」p499 「新日本古典文学大系」p313 「日本古典文学全集本」p206  
なお、3本の本文には異同がない。

#### 参考文献

- ・ 賛 裕子「道長と紫式部の贈答歌—『紫式部日記』—」日本文学協会編、2011、60巻9号 pp.52～56
- ・ 河合隼雄『紫マンダラー—源氏物語の構図』小学館、2000